

## 私のロータリー史 I

### 入会

私が芦屋ロータリークラブに入会したのは1970年10月でした。当時、芦屋クラブは創立10周年を迎えた直後でした。「芦屋クラブは二部上場の会社の人しか入れないが、若手の幹事候補として、特別に入会を許す」と言われました。入会してから、阪神電鉄、阪神交通社、ダスキン、加藤産業等数多くの社長が在籍していることが分かりました。

内規で職業分類が詳しく定められており、医師は内科、外科、その他の科各1名ずつとなっており、今回は耳鼻科の医師が退会したので、眼科の私が選ばれたとのことでした。

推薦者の2名の会員が、家庭訪問をしたり、3ヶ月ほど付きっきりで、地区大会や他のクラブへのメーキャップに連れて行ってくれました。

私は、1年半後に必ず回ってくる幹事の役割について大きな不安を感じて、特別代表としてクラブに訪れた神戸東ロータリークラブの安福武之助氏(1976年ガバナー・福壽酒造社長)に助けを求めました。「何時でも訪ねて来なさい。」という同氏の言葉に甘えて、会社を訪れると、飴色の日本酒の古酒とともに、ロータリー談義に花が咲くとともに、徐々に不安が解消していきました。実にいろいろなことを教えていただきました。

「新しく勉強会を発足するので参加しなさい」と言われて、関西ロータリー研究会に入りました。第一回のセミナーが御影の神戸銀行で開催され、小堀憲助氏が「ロータリー発生史」という題で講演しました。翌年、この会が分裂して、「千種会」になりましたが、私は関西ロータリー研究会に残りました。

1976年には再び幹事に就任し、安福ガバナーが国際協議会に出発する際には、空港まで見送りに行きました。

### 世界社会奉仕 WCS

1988年、2680地区国際奉仕委員長に任命されました。私の地区では従来は、金銭によるWCSしか行っていなかったのので、現地に行ってプロジェクトを探そうと考えて、事前にWCSプロジェクト交換表から10ほどのプロジェクトを選んで、田中視郎WCS委員長(三木RC)と共に、身近なフィリピンに行きました。

メイン・プロジェクトとして、マニラの最貧地区ナボタスにロータリー・センターを建設して、そこを拠点に今後長期スパンで活動を続けることにしました。

ナボタスとケソンにはスモキー・マウンテンと呼ばれている巨大なごみの集積場があり、自然発火した煙が立ち込めていました。そこでごみ拾いして生活している人が大勢いました。その周辺では毎日1~2名の子供が、餓死か病気で死んでおり、その死体が無造作に放置されていました。

1989年、WCS委員と共に現地を訪れ、8件ほどのプロジェクトを選別して持ち帰り、実施クラブを決定しました。

- ◇ ネグロス島の深井戸掘り2件
- ◇ ユニバーシティ・クラブと共同白内障手術 私が個人的に参加して、最終的に約50人に施術しました。
- ◇ スープ&キッチン・フード・バンク
- ◇ 水浄化装置2件

1990年にロータリー・センターが竣工して、それに伴って

- ◇ 無料医療検診
- ◇ 無料歯科検診
- ◇ 縫製工場 ミシン20台
- ◇ 養豚事業援助

## ◇ ピナツボ火山被害現地調査

地区の WCS 委員、毎日新聞記者が同行しました。帰国後、新聞の地方版に 5 回の連載記事が載りました。その後、毎年のように現地を訪れましたが、1996 年、私がガバナーに就任したため、2~3 年中止になりました。

2000 年からは石井良昌国際奉仕委員長(後に 2005 年ガバナー)もこのプロジェクトに加わりました。

2004 年、私は RI の識字率向上委員に任命されました。そこでフィリピンの小学校にこれを取り入れることを思いついて、オーストラリア・クイーンズランド RC のリチャード・ウオーカー委員長に申し入れました。同氏の著書や数多くの資料を頂いて、フィリピン 3800 地区に提示しました。同地区のノースベイ・イースト RC、ケソン・ノース RC 等がこのプロジェクトに関心をもってくれました。

フィリピンでは公用語は英語ですが、貧しい人たちはタガログ語しか話せません。英語が話せなければ、優位な職業に就くことはできません。そこで、小学校の義務教育に英語とタガログ語をバイリンガルで学ぶために CLE を取り入れようと考えたのです。

先ず、ナボタス学区の 3 小学校の 1 年生の教師 21 名を養成することから始まり、順次拡大していきました。

2007 年から、その小学校の CLE を取り入れた授業が始まり、やがて、マニラ全市にその輪が広がっていきました。

そのころから私は体調を崩したため、石井バスターガバナーがこの役割を引き継いで、この事業を拡大して、最終的には、3-H プロジェクトになり、更に CLE に基づく教育をフィリピンが全国的に採用されるという、大事業になりました。

2013 年に最初の卒業生が旅立ちました。卒業生代表が流暢な英語で感謝の辞を述べました。CLE の効果は絶大なものがあり、英語に苦手な日本でも義務教育に採用すべきだと思いました。

## 留学生援助

1985 年に米山奨学生の丁玉麟(台湾・神戸大学経済学部修士課程)君のカウンセラーをすることになりました。彼は奥さんを台湾に残して単身日本に来ていたので、呼び寄せるようにいって、別棟の住宅を提供しました。

彼はコンピューターに堪能だったので、私もそれに挑戦して、1 年後には、コンピューター・ソフトウェアの会社(アシコン)を設立して、留学生にアルバイトの場を提供しました。当時は主に銀行の IT 化が進んだところで、銀行統廃合に伴うシステム転換の作業があふれていました。

大手商社に勤めていた小川氏が会社では扱わない小規模の仕事を回してくれました。

当時の留学生は、男性は料理店の皿洗い、女性は風俗店のアルバイトが主だったので、私の会社アシコンには真面目でコンピューターに堪能な留学生が大勢集まってきました。

眼科医院に隣接したコンタクトレンズ・眼鏡店の二階を改造して、留学生に提供して、収入の 20%を会社に、80%を留学生に分配しました。最盛期には 30 名ほどの留学生が働いていました。博士課程に進んだ丁君がこの会社の運営をすべて仕切ってくれました。私はゲーム・ソフトをいくつか作って、大手のソフト会社から販売されました。

1990 年頃には、コンピューターができない留学生も集まって来て、アシコンは情報収集の場に化し、連日賑っていました。

マスコミもこの事業を取り上げて、各紙が連日のように取材に訪れました。ロータリーの友にも掲載されました。

残念なことには、1995 年 1 月 17 日に起こった阪神大震災によって、全てが廃墟と化しました。眼科の診

療所もコンタクト・眼鏡店もアシコンも住居も廃埃と化しました。

震災当日は午前中は救急診療所で血まみれになって処置をし、夕刻から夜にかけて、警察学校に赴いて、山のように積まれた死体の死亡診断書を60通ほど書きました。

崩壊した我が家の整理には、連日のように留学生が訪れてくれ、瓦礫の撤去から水汲みまですべての作業をしてくれました。

なお、丁君はその後日本国籍を取得して、大手のコンピューター会社に入社して、ジャカルタ支店長になりました。さらに後日アシコンに通っていた中国とアメリカの留学生2名が日本に帰化して、現在も日本で働いています。